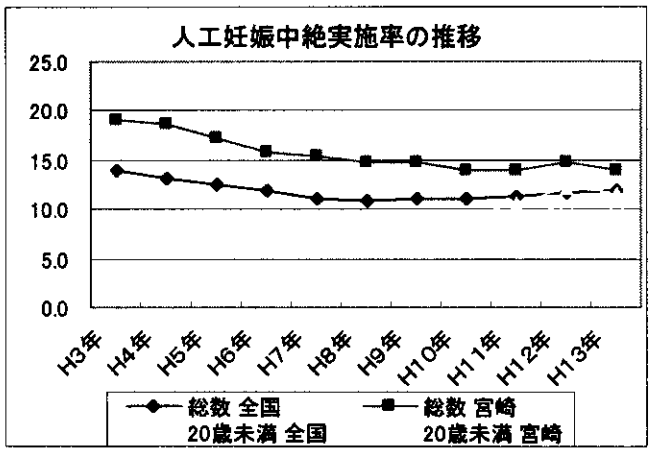
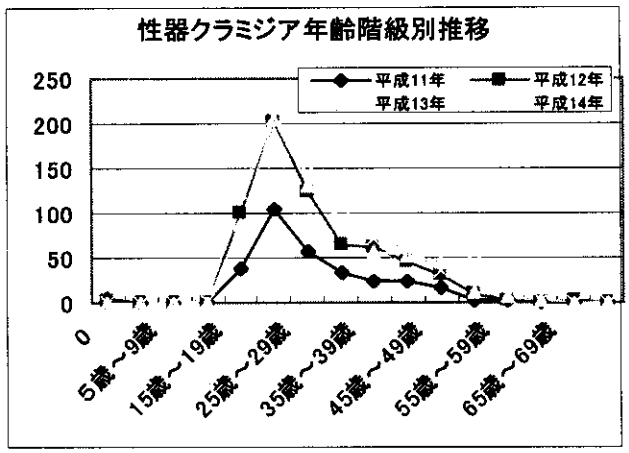
宮崎県におけるピアカウンセリング事業の取り組み

共同研究者：木添茂子　　宮崎県福祉保健部保健薬務課
前田ひとみ　宮崎医科大学医学部看護学科

1．事業に取り組んだ背景

本県での思春期保健の取り組みは、保健所で「思春期保健教室」の開催、学校、地域に出向いて、講話をするなどの従来の指導型の教育を実施してきた。また、学校教育においても早期から性教育が施されているにもかかわらず、本県においても全国と同様、性器クラミジア感染症、１０代の人工妊娠中絶は増加している状況である。このような中、平成１２年度に「健やか親子２１」の主要課題の１つに、思春期保健対策の強化と健康教育の推進が示され、その中でピア・エデュケーションが有効であること、今後、ピアカウンセラーの養成とピアカウンセリングの取り組みの推進が盛り込まれていた。これまでの思春期保健教育のあり方に疑問を抱き、新たな教育の方法を導入したいと考え、平成１３年度から事業を予算化しピアカウンセリング事業に取り組んだ。





2．事業の展開

1）実施までに至った経緯

平成１２年度

１３年度の予算を編成する段階で、県教育庁福利健康課に新規事業を説明し事業について理解を得た。また、財政担当課に対しても若者の性行動や健康教育の方法等について説明し理解を得た。

平成１３年度（１年目）

「ピアカウンセラー養成講座」の実施

(1)研修会（県・宮崎市保健所共催）

当県では、ピアカウンセリングは初めての試みであり、まず、関係者がピアカウンセリングとはどういうものなのかということを理解するために研修会を開催した。研修会を実施するにあたっては、教育庁福利健康課が県内２つの県立高校に声をかけ学生３０人に参加してもらった。また、県内の大学にも案内を出し参加を呼びかけた。その結果、宮崎医科大学看護学科の学生５人が参加し、自治医科大学看護学部学生のピアサポートとしての役割を担った。

平成１３年８月

１日目;自治医科大学看護学部教授講演「なぜ今ピアカウンセリングなのか」

２日目;自治医科大学看護学部学生によるピアカウンセリンの実際

(2)ピアカウンセラーの養成

８月の研修会に参加した宮崎医科大学看護学科の５名の学生がピアカウンセラーに興味を示したこともあり、大学と話し合いをもち、組織作りを始めた。ピアカウンセラーの養成に関しては、大学と連携を図りながら事業を実施していくこととした。平成１３年度は１０名の学生がピアカウンセラーとしての活動を希望し、サークル的な活動として動き始めた。

研修会に参加した５名の学生を中心に、１０名の学生は、休日や放課後に自主勉強会を開催し、ピアカウンセラーとしての資質を高めていった。看護学科の教官は、スーパーバイザーとして、学生の指導に当たられた。

平成14年３月に栃木県で開催された、「ピアカウンセラー養成講座」に３名の学生が参加し、ピアカウンセリングの知識を深めるとともに、全国のピアとの情報交換によって意欲が高まり、自分たちのピアカウンセリングを考える機会ともなった。

①ピアカウンセラーとしての活動の場

平成１３年１２月

１０名の大学生は日頃の活動を発揮する場として、８月に参加した高校生に対してピアカウンセリングを実施した。高校生はピアカウンセラーとして活動したいと考える学生１８名が参加した。

平成１４年３月

ピアカウンセラーとして、話し相手にとって、よい聴き手になるために必要な態度や質問の仕方や自分たちの生活の中で、よい聴き手としての聞き方を知るという目的で講座を開催し、１２名の高校生が参加した。

平成１４年度（２年目）

「ピアカウンセラー養成講座」

初年度に養成した大学生のピアカウンセラーが県内８保健所においてピアカウンセリングを実施することとし、県内でのピアカウンセリングの普及をめざした。

事業を実施する前には、大学の先生と保健所の担当者が実際の展開について２回話し合った。また、教育委員会からは、県内の県立高校に対して協力依頼文書を出してもらった。さらに、校長会においてピアカウンセリングについて説明し協力を依頼した。

３.ピアカウンセリングを実施しての反省点

１）学校との話合いを充分行う。

(1) 教育委員会との話合いはできていたが、各県立高校の養護教諭や保健主事との話し合いが不十分であった。

(2) 学校関係者の中には、ピアカウンセリングについての理解が得られない人もいて保健所の担当者が苦労した所もあった。

２）養護教諭等とプログラム作成を行う。

各学校、地域において問題点も様々であり、地域性を捉えた企画が必要である。

３）事業のネーミング

１３年度の事業の目的は、ピアカウンセラーを養成することであったため、「ピアカウンセラー養成講座」として取り組んだ。１４年度は「ピアカウンセリング」の実際であったため、「ピアカウンセリング講座」にすべき所を、１３年度と同じ事業名で取り組んだため、受講者にとまどいを与えた。

４） 保健所担当者との共通理解をもつ。ピアカウンセリングの研修会は、13年度に開催したのみであったため、14年度に保健所で実施する段階で、担当者に戸惑いも見ら

れた。実施する前に役割分担など明確にしておくことが必要である。

4.プログラムの紹介

プログラムは資料のとおりに実施した。

5.今後の課題

1）教育委員会と一体となったピアカウンセリングの取り組み
2）ピアカウンセラーが活動する場の確保
3）受講した高校生をピアカウンセラーとして養成する指導者の養成

6.2年間を経過して

ピアカウンセリングを初めて2年が経過した。ピアカウンセリングを実施するには、ピアカウンセラーを養成することから始めなければならい。当初の計画では、保健所で養成していく予定であったが、幸運なことに13年度に開学した宮崎医科大学看護学科の先生との出会いが、宮崎県でのピアカウンセリングを普及させることにつながったと考えている。もし、この出会いがなければ、宮崎県では浸透しなかったと考える。2年目にして、県内8保健所全域で実施することができたのも、看護学科の先生、そして、ピアカウンセラーの意気込みがあったからと思う。県教育庁福利健康課としての動きもあり、今後は、教育庁と一体になってこの事業が取り組めるものと期待する。

駆け足で突っ走っている気もするが、実施後にも、学校からの関係者から評価する意見が多く、受講生も、肯定的に受止めていることは、ピアカウンセリングが高校生に受け入れられている現れだと考える。

今後は、プログラムの見直しや、学校関係者への一層の理解を得られるよう働きかけていきたい。

資料

≪1日目；講座1≧

タイトル	活動のねらい
私は、守護霊ゲーム	温かい目で、自分を見ているか？どのように自分自身を理解しているかを知る。
人生設計	・過去、現実、未来を見つめ人生設計を立てることによって、今、妊娠したらどうなるのかを考える。→産むか産まないかの選択をする。 ・妊娠によって、今の人生設計が変わってしまうことを認識する。→できれば夢を実現させたい。→望まない妊娠はさけよう。セックスするかしないかを選択する。
避妊とＳＴＤ	・避妊についての理解を深める。 ・100%の避妊法はないと言うこと、避妊道具を併用の有効性を知る。 ・ＳＴＤについて知る。 ・ＳＴＤを防ぐ方法は、コンドーム以外にはないことを理解する。
コンドーム・ネゴシエイト	・コンドームの使用について選択し、話し合うことの必要性を知る。（セックスするかしないかの選択も含む） ・自分の考えや思いを言葉で相手に伝えるための技術について考える。

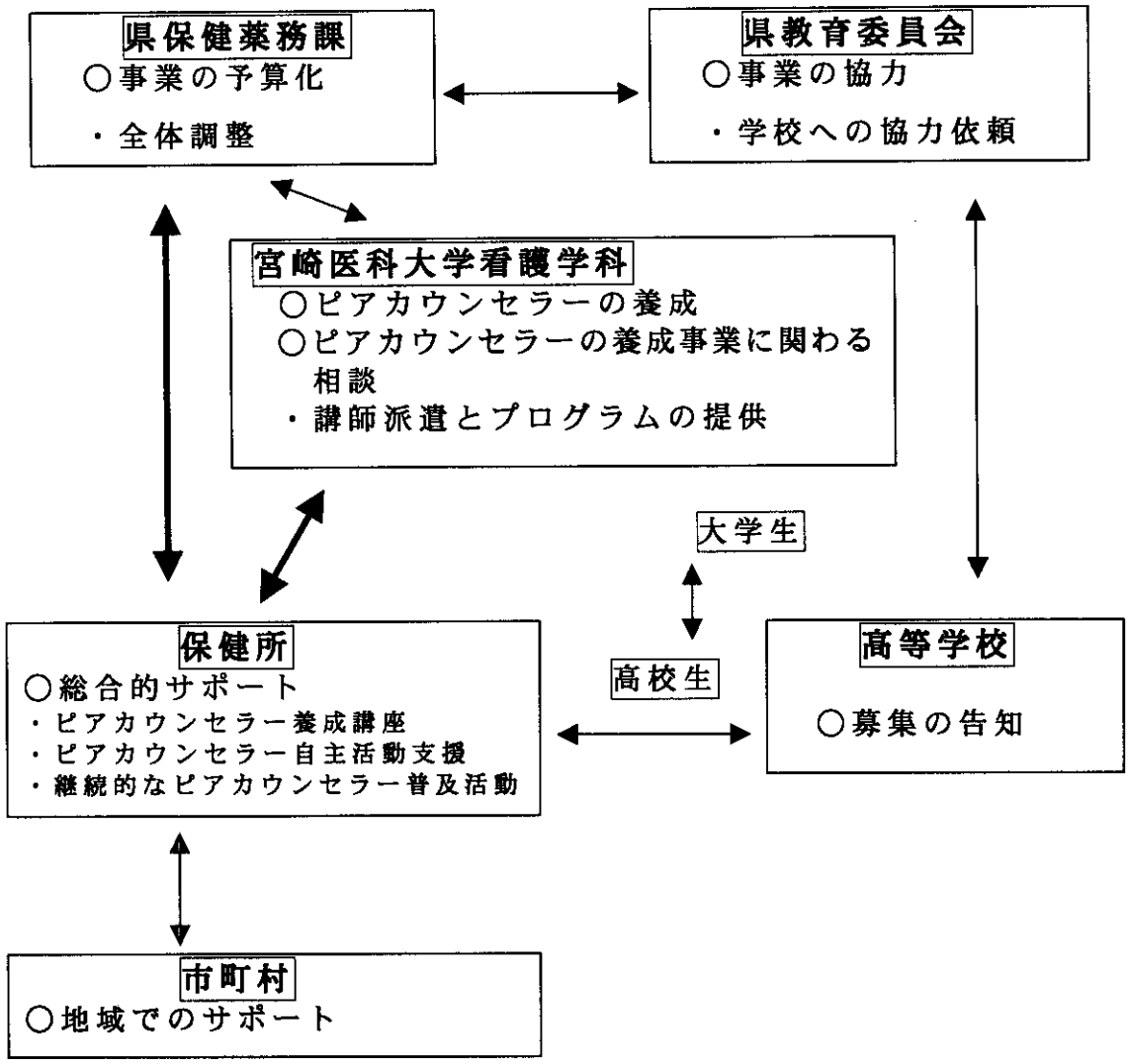
≪2日目；講座2≧

タイトル	活動のねらい
言って欲しい事ゲーム	自分が言って欲しい褒め言葉を言ってもらうことによって、自分のことを好きに成ってもらいと同時にお互いがそれぞれの存在を認める。
流されて	・自分の意見を他人の前で述べることができ、みんな意見をグループ全員で共有することによって、お互いが色々な考えを持っていることを知る。 ・十分に話し合うことによって、それぞれの立場で考えると、自分と異なる意見も重要であることを知り、自分の意見も他人の意見も認め合う。
話の聞き方	聞き手の姿勢や、態度が話し手の話そうとする意欲や話しやすさにどう影響するかを考える。
質問の仕方	相手の話を引き出すための質問の仕方について考える。

≪3日目；講座3≧

タイトル	活動のねらい
コ・カウンセリング	２人１組になって、カウンセリングの技法について演習する。
終了証書	今までの復習を行い、ピアカウンセラーとしての意識を持ってもらう。そして、今後のピアカウンセラーとして活動してもらう。

宮崎県における連携体制図



佐賀県におけるピアカウンセリング事業の取り組み

共同研究者：大久保京子　佐賀県厚生部健康増進課

１　事業取り組みに至った背景

（１）県の概要

本県は九州の北西部に位置し、東は福岡県、西は長崎県に接し、北は玄海灘、南は有明海に面している。

平成１５年３月現在の推計人口は約８７万４千人であり、うち１０～２０歳代の占める割合は約２５％である。

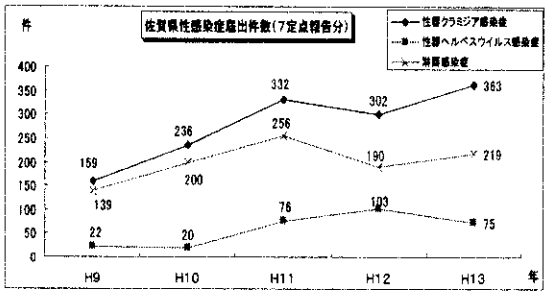
県内には４年制大学３校、短期大学３校、看護学校（准看護師養成コース除く）１１校、高等学校４７校であり、保健所数は５である。

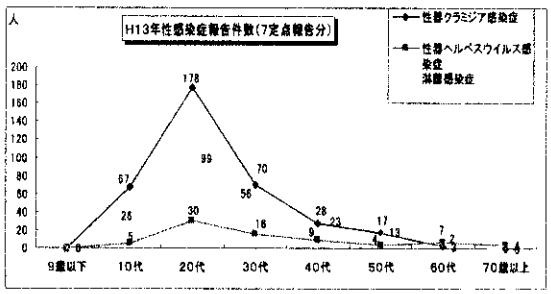
（２）事業取り組みのきっかけ

本県では他県と異なり、エイズ・性感染症予防教育の一環としてピアカウンセリング事業に取組んでいる。

以下、その取り組みのきっかけについて紹介する。

①　本県のＨＩＶ感染者／エイズ患者の報告件数は、平成１３年末現在で３件と他県に比し少ない状況であるが、性感染症に関しては７医療機関の定点報告によると年々増加傾向にあり、特に１０～２０歳代の若者がその６割を占めている。

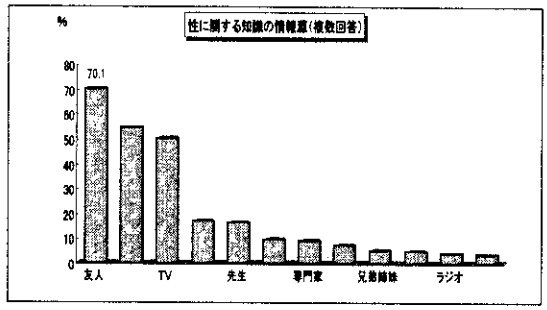


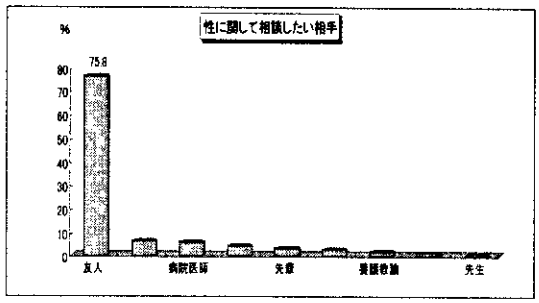


②　平成１２年７月に佐賀中部保健所が実施した、管内１６高等学校の１年生４，４５７名を対象とした「性感染症に関する調査」(有効回答８５．９％)によると、回答者の１０．９％に性交経験があったこと、その性交経験者のうち、６７．５％は性感染症に感染する可能性が全くない、または低いと思っていることがわかった。

また、性に関する知識の情報源は友人からが７０．１％と最も多く、性に関する悩みを相談したい相手としても友人が７５．８％と最も多かった。

この調査から、性に関して「友人」というのは重要なキーポイントであることが伺えた。





③　平成５年度から県教育庁体育保健課の協力のもと、県内の全高等学校（４７校、定時・通信制含）の１年生を対象に、「エイズ予防講演会」を実施している。

この事業は、保健所が高等学校と日程及び講師について調整し、医師、保健師及び助産師等の専門家を各高等学

校に派遣し、エイズ・性感染症に予防に関する講演を実施するものである。

しかし、エイズ・性感染症予防等に関する知識を学ぶという点では重要な事業ではあるが、一方通行である知識伝授型の教育は継続して生徒の中に残ることが少なく、行動変容までには至らないことを感じるようになった。

以上のような理由からこれまでのエイズ・性感染症予防教育の見直しの必要性を感じていたところに、全国的な広がりを見せ始めた、正しい知識をもとに同世代の価値観を共有する仲間が本音で話し合い、性及び生にかかわる態度や行動を自己決定できる能力を育てるピアカウンセリングの有効性を知り、保健所職員からも是非取り組みたいとの要望があったため、平成１４年度から、エイズ予防講演会を発展させた参加型の事業として当事業に取り組み始めた。

２　立ち上げのための関係機関との連携づくり(図 1)

【ピアカウンセラー養成についての連携】

ピアカウンセラー養成に熱心である佐賀医科大学及び看護学校の代表として県立総合看護学院に事業への協力依頼実施。

【県教育庁体育保健課との連携】

県教育庁体育保健課に、事業の説明及び高等学校へ協力依頼する場合の進め方等について相談したところ、

① 春期の若者へのアプローチとして良い取り組みだと思うが、教育側としては、なぜこの事業を健康増進課が実施するのかという理由をきちんと整理してほしい。

② た、当初は高校生を公募で集め実施する予定であったが、初年度はピアカウンセリングの周知を図るため、拠点高校をいくつか決め協力を求めたほうが良いのではないか。

との助言を得た。

○助言についての回答

① 高等学校及び保健所ともに定着した事業である「エイズ予防講演会」を発展させた参加型の事業としてピアカウンセリングを実施する。

② 将来的に各保健所毎にピアカウンセリングを実施し、其々の地域で有能な若者を育てていくことを目指し、地域性等を考慮し県内の１１高等学校を拠点高校として選定し、それぞれの選定理由を明確にした。

また、各学校からの参加人数を限定することにより、事業実施の際は高校生が学校の人間関係を持ち込まず本音で話しあうことができるよう、拠点高校を多く選定した。

以上の経緯により体育保健課の協力を得る。

【１１拠点高等学校との連携】

体育保健課保健係長が、事前に各高等学校の養護教諭に連携について連絡をしてくれていたため、当課から連絡をした際はすんなり協力を受入れてもらえた。

※ 平成５年度から継続して実施している「エイズ予防講演会」は、ピアカウンセリング事業実施に係る連携の基盤となった。

３　事業の展開

まず、事業に取組むに先立ち先進地調査による情報収集に努め、さらに、ピアカウンセリングについての知識を得るとともに、他県との連携を図るきっかけづくりのため、保健所職員等を積極的に研修会に参加させた。

また、当事業の継続性を目指すとともに関係機関との連携を図るため、事業実施前に必ず会議の場を持つようにした。

具体的展開の実際については、「性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング」及び教授からの直接の助言を参考とした。

【主な展開の実際】

○「第１回ピアカウンセリング事業に関する会議」開催（平成 14 年 6 月 24 日）

・参加者…県体育保健課保健係長、11 拠点高校養護教諭、佐賀医科大学保健管理センター職員、県立総合看護学院教員、各保健所職員、県健康増進課

・内　容…・第１回ピアカウンセリング指導者研究集会復命
・ピアカウンセリング事業（案）について検討
・第１回ピアカウンセリング事業実施について検討

○「第１回ピアカウンセリング事業」実施　（平成 14 年 7 月 31 日）

事業の周知を図る目的で、先進的にピアカウンセリングに取組んでいる宮崎医科大学医学部看護学科のピアカウンセラー８名を招き事業を実施した。

・参加者…拠点高校の高校生４１名、佐賀医科大学学生８名、県立総合看護学院学生１名

・関係者…３９名（マスコミ取材あり）

○「第２回ピアカウンセリング事業に関する会議」開催（平成 15 年 2 月 19 日）

・参加者…１１拠点高校養護教諭、佐賀医科大学保健管理センター職員及び学生５名、各保健所職員、県健康増進課

・内　容…・第１回ピアカウンセリング事業についての感想・意見
・第２回ピアカウンセリング事業の内容検討

○「第２回ピアカウンセリング事業」実施　（平成 15 年 3 月 17 日）

・ピアカウンセラー…佐賀医科大学学生１１名

・参加者…拠点高校の高校生４５名

・関係者…２４名（マスコミ取材あり）

※終了後事業についてのピアカウンセラーと関係者に分かれ反省会実施。

4　問題点及び今後の課題

・ピアカウンセラー養成について

→　事業を実施するためには一番重要な部分であるが、現在佐賀医科大学保健管理センター職員が養成にあたっているものの、スーパーバイザー等の不在により負担が大きいようである。

今後は養成講座を開く等、県としても養成に関わっていく必要があると考える。

・事業実施後の支援体制が不十分である

→参加した高校生をどうサポートしたら自主的活動等に結びつくの、か養護教諭も保健所職員もわからない状態である。

ただし、保健委員の高校生が自主的に、“かけがえのない自分を大切にしてほしい”というメッセージを仲間にも是非伝えたいからと、養護教諭及び保健所職員の協力を得パンフレットを作成した。

また、学校側の先進地視察で栃木県に出向いた養護教諭もあり、活動が少しづつ拡がりつつある。

・関係機関の役割分担までに至っていない。

・ピアカウンセリングという言葉が一人歩きし、ピアエデユケーションと同じものと考える等とらえ方が様々である。

以上の問題点解決のため、まず関係者の研修会を開催し、ピアカウンセラー及び高校生を支える関係者の意思統一を図りたいと考える。

さらに県では、保健所の機能強化のひとつに当事業が位置付けられたため、今後この事業が地域に根付いていくことを目的に、平成１５年度からは各保健所毎に地域の関係機関と連携を図りながら事業を展開していく予定である。

5　事業に取組んでの初年度の感想

初年度は県健康増進課で事業を立ち上げ、将来構想を視野に置いて関係機関を多く設定したため会議や事業実施の日程調整に労力を要した。

しかし、会議を実施することにより各機関の現場の状況や要望を知ることができた。

また、県で取組んだ利点は、県教育庁との連携や他県との情報交換等が図りやすかったことである。

6　事業の将来構想

・行政、教育機関、地域（ボランテイア含）等の連携の強化が図れ、地域ぐるみでの若者の支援体制ができる。
・ピアカウンセラー及びピアカウンセリングを受けた高校生が核となり、学校や地域での自主的活動に広がる。
・自己決定のもと、自分を大切に、また周りを大切にする若者が増える。
・大学生、高校生、中学生等が学ぶ場として気軽に保健所を活用する。
・若者の性感染症（エイズ含）及び人工妊娠中絶数の減少。

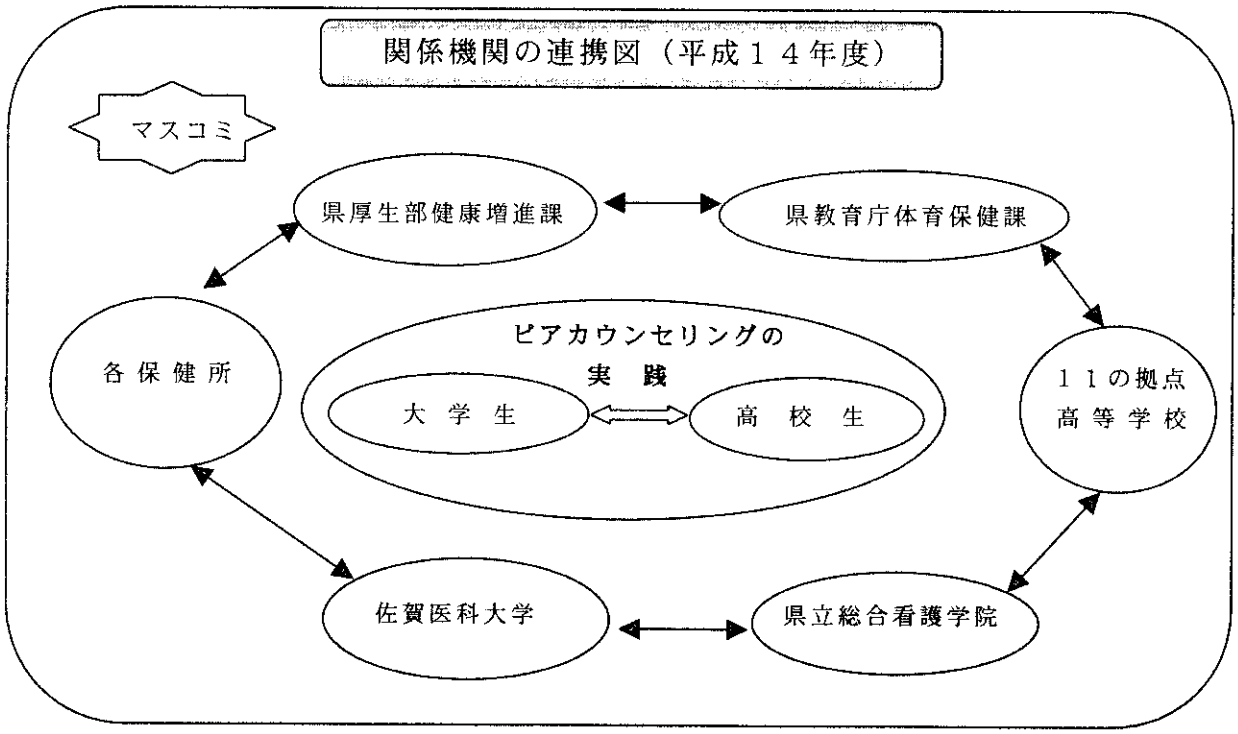
7　マニュアルに要望する項目

・ピアカウンセラー養成についての具体的カリキュラム等。
・参加した高校生の支援体制について。
・具体的な事業の評価について。

（参　考）

時　期	内　容
平成１４年３月	・ピアカウンセリングの周知のため講演会開催 演題「ピアカウンセリングの実践について」 講師　日本子ども家庭総合研究所　宮原 忍　先生 ・先進地調査（宮崎県）…大学でピアカウンセラー養成 県の担当者…事業の立ち上げ状況等について 宮崎医科大学…ピアカウンセラー養成について ・保健所を含めた担当者会議での話し合い実施
４～５月	・課内検討実施 ・佐賀医科大学及び県立総合看護学院への協力依頼 ・県教育庁体育保健課への協力依頼 ・県内１１の拠点高校を選定し養護教諭レベルへの協力依頼
６月	・第１回ピアカウンセリング指導者研究集会（日本家族計協会実施）に県より２名参加 **・第１回ピアカウンセリング事業に関する会議実施**
７月	**「第１回ピアカウンセリング事業」実施**
９月	・先進地調査（高知県）…県でピアカウンセラーを養成
１０月	・第１回ピアカウンセラー養成講座（東京都八王子にて開催）に、佐賀医科大学から学生３名、指導者１名参加。
１２月	・第１回ピアカウンセラー養成講座受講者の研修伝達を佐賀医科大学にて実施 ・第２回ピアカウンセリング指導者研究集会に県より２名参加
平成１５年２月	**・第２回ピアカウンセリングに関する会議実施**
３月	**「第２回ピアカウンセリング事業」実施**

図１



小山市における思春期ピアカウンセリング事業の取り組み

共同研究者：松沼瑞枝、堀江標、山縣千開　小山市健康課

Ⅰはじめに

健やか親子21の主要課題に、思春期保健対策の強化と健康教育の推進が示された。その具体的な取り組みとして、同世代から知識を得るピアエデュケーション（仲間教育）、同世代が共感・共有しながら、態度や行動の自己決定を支えるピアカウンセリングなど、思春期の若者が主体となる事業の地域での推進が明記されている。

小山市では、平成5年度より思春期保健事業の一環として、高校生を対象としたピアカウンセリング講座を実施しており、現在では定着した事業となっている。その実践課程において、地域としてどのように関わったかについて報告したい。

Ⅱ小山市の概要

小山市は栃木県南部にあり東京から約60kmの距離に位置した、思川・鬼怒川に囲まれた緑豊かな街である。鉄道や国道も発達しており、首都圏の通勤・通学圏内として、人口155,198人（平成12年）で平成7年から5年間で約5千人増加し、増加率3.4%と県平均1.0%を大きく上回っている。また、高齢化率は14.1%（平成12年）と国（17.5%）・県（16.6%）に比較して若い都市である。転出入の多い新興住宅地と、郊外の農村地帯とバラエティに富んでいるのが特長であろう。

Ⅲ思春期ピアカウンセリング講座実践までの課程

当時の小山市の状況として、老人保健法の施行に伴い、成人・老人関係の業務が増加しつづける中で、母子関係の事業に充分に力を入れるのが困難な状態であった。しかし、平成4年度に『健康都市おやま』宣言をし、疾病の予防強化を重点に事業を展開する中で、子どもからの生活習慣病予防として、学校保健との連携を取り始めていた。しかし、思春期保健の取り組みとしては、思春期の子を持つ親への健康教育や婚前セミナーなど単発の事業を実施することはあったが、一方的な知識の伝達や押し付けに終わってしまい、対象者の選定や実施方法に疑問を感じながらも、実際にどのような方法が効果的かわからなかった。

平成4年度頃、県南地区の10歳代の人工妊娠中絶が目立って高く、増加傾向にあることから、管内保健師業務研究会で養護教諭と合同の研修会を持ち、また小学6年生と中学2年生及びその保護者約1万1千人を対象にアンケート調査を実施した。その結果、性の悩みを誰にも相談できない人が多く、親と子の回答結果に著名な意識の違いが認められた。何らかの対策の必要性を強く感じていた。

その中で、調査の助言をしていただいた自治医大より新しい性教育の手法としてピアカウンセリングを紹介された。従来、保健師が行ってきた指導型の健康教育と異なり、正しい知識をもとに仲間同士が本音で話し合い、性にかかわる価値観・行動を押し付けではなく、自分で決定していけるようサポートするというまったく新しい手法で

あった。その手法に新鮮さと同時に魅力を感じたが、イメージ化が困難で戸惑いもあった。また、職場内でも新事業を立ち上げる不安や意見の違いがあったため、実施している近隣の町より情報収集をしたり、ビデオで実際の内容をみてイメージ作りを行い話し合いを重ねた。その結果、約半年後には「思春期は型にはまった健康教育では限界がある」「大変ではあるが効果が得られるかも」と前向きな意見が多くなり、実施に向けて大きく前進した。

当時、高校の教育現場を知る機会が無かったので、情報を得ることが必要と感じ、合同研修や調査を実施して連携が出来つつあった養護教諭と『思春期に関する連絡会議』を開催することとなった。その中で生徒が性の知識を得るのは、ビデオや雑誌・テレビや友達など曖昧で興味本位な情報であり、みんながそうしていると思ってしまうこと、一番知りたいのは教科書に載っている保健ではなく好きな人とどうするかを選択できる能力であると、現状を捉えた率直な意見が出されると共に、問題がおきてからの対応になってしまう歯がゆさを感じていることがわかった。この連絡会議を何回か行い、ピアカウンセリングの事業化を提案し賛同を得ることが出来た。

この事業の特性を考え、多方面の関わりにより事業が円潤に進められると判断し、県南健康福祉センターに協力を要請した。以前アンケート調査を共同で実施した経緯もあったため、協力体制は容易に得られた。関係者で会議を数回開催し、事業化への検討を行うとともに、学校長の理解を得るため、実際に訪問して説明を行った。こうして学校長の理解を得て、思春期ピアカウンセリング講座を実施することが出来た。検討を開始して 2 年目と短期間に実施することが出来たのは、次の 4 点である。

① 最初の段階からネットワークを意識し、実施機関【小山市・県南健康福祉センター・小山市学校保健会高校部会（市内 5 校の養護教諭）・自治医科大学看護学部】が実施に向けて検討を行ったこと。（図．1参照）
② 共通理解を得るため、会議や学校訪問を行い調整を図ったこと
③ 養護教諭が学校内部の調整を図り、学校長や教職員の理解を得たこと
④ 実施機関それぞれが、目的を同じくする仲間として役割を担ったこと
（表．1参照）

これらのどの点がかけていても実施は、困難であったと思われる。

Ⅳ思春期ピアカウンセリング事業開始後の広がりと今後の課題

この事業を通じて、養護教諭との関係を築くことができ、問題を抱えた生徒の支援を依頼されたり、教材（避妊具等）の相談や情報提供など多方面で連携を取ることが出来るようになった。その他にもエイズキャンペーン事業の開催や、小中学校の養護教諭と開催している「学校保健との連絡会議」で性に関することを検討する機会が得られたりと、ピアカウンセリング事業から思春期全体の取り組みが活発になった。

年 1 回で実施していたピアカウンセリング事業であるが、平成 9 年度より、講座を受けていない生徒に正しい性の知識・行動・自己決定能力を伝達するセミピアカウンセラーを育成できるよう、ステップアップのための応用講座を実施している。この時のセミピアが、

平成 10 年度のピアカウンセリング講座に参加し、セミピアカウンセラーとして補助的役割を果たしてくれた。

年 2 回の日程で実施してから、6年が経過している。(表. 2参照) 応用講座を卒業した、セミピアカウンセラーが講座の中で補助的役割を担ったり、また、学校内の活動として自分達が学んだことを発表したり、学校祭で性に関する内容を取り上げたりと、幅広い活動を実践しているようである。受講後の生徒の反応を見ていると、自分が学んだこと・感じたことを、周囲の人に伝えたいという気持ちか予想以上に高まっているようである。受講生の周囲に伝えたいという気持ちを何らかの活動に結びつけていけるよう、サポートしていく体制づくりが必要となってくる。(表. 3～5参照)

Vおわりに

小山市が思春期保健の一環として、ピアカウンセリング講座に取り組み始めてから、早くも10年が経過しようとしている。開始当時は、思春期保健は市町村にとって特別な分野であるという意識もあったように思われるが、21世紀を迎えて、新たな母子分野におけるヘルスプロモーションの実践を目指す『健やか親子 21』の中でも、4 つの主要課題の一つとして取り上げられるほど、その重要性が指摘されている。

これに対する取り組みでは、地域における保健・医療・福祉・教育等の各分野の取り組みの強化に加え、ＮＰＯ、ボランティア、マスメディアの協力を得て連携を深めていく必要がある。

今後の課題として

① 地域の中で、セミピアカウンセラーの活動できる場を提供していくこと。
② ピアカウンセリングの効果を示し、学校保健との取り組みの中で、さらに深めていくこと。
③ 高校生だけでなく、中学生に対する思春期保健事業へとつなげていくこと。

以上の点を通じて、地域の中にピアカウンセリングの効果が波及していくよう活動を支援していきたい。

また、平成 14 年度より栃木県が、思春期保健対策の強化として、県内全域に思春期ピアカウンセリング事業を取り入れている。ピアカウンセラー養成講座に予想を上回る申し込みがあり、1コースの予定を急遽2コースに増設することとなった。この事は、思春期ピアカウンセリングが関係者のみならず、若者自身にも認められ、必要とされている証であると言える。

小山市では国の「健康日本 21」を受けて、『健康都市おやま 21』という母子保健計画も盛り込んだ総合的な健康づくりプランを策定し、平成 15 年度より推進を図っていく。この中では『子どものこころを育てる』というテーマに重点を置き、思春期の子どもたちが自分も他人も大切に、大人へと成長していくことができるよう、取り組んでいく予定である。

思春期の人口割合が全国平均より高い小山市の将来を支える若者たちが、健やかに成長していけるよう、これからも積極的な支援を行っていきたい。

表1. 実施機関の役割

実　施　機　関	役　　割
小山市健康課	企画に関すること、関係機関の調整・会議の運営、広報活動に関すること、費用の支出
県南健康福祉センター	関係機関の調整、費用の支出
自治医科大学看護学部	（ﾋﾟｱｶｳﾝｾﾗｰ） ﾋﾟｱｶｳﾝｾﾗｰとしての役割を果たす 当日の講座の運営（受付・司会含む） （高村教授） ﾋﾟｱｶｳﾝｾﾗｰの養成・指導 全体のスーパーバイズ
小山市学校保健会高校部会（５校）	高校内の内部調整（関係職員） 職員への講座への理解を深める 高校生の出席について配慮

表2. 思春期ピアカウンセリング講座の参加状況

（　）はセミピアの人数

	実　施　日	男子	女子	合計	ﾋﾟｱｶｳﾝｾﾗｰ
1回	平成 5年11月23日	8	41	49	20
2回	平成 6年 6 月18日	36	51	87	25
3回	平成 7年12月16日	31	45	76	20
4回	平成 8年 6 月 1日	21	44	65	30
5回	平成 9年12月10日	14	36	50	18
継続	平成10年 1 月17日	6	8	14	6
6回	平成10年12月19日	23	32	55	10(10)
継続	平成11年 1 月16日	9	12	21	6(2)
7回	平成11年12月18日	22	40	62	16(5)
継続	平成12年 1 月15日	0	17	17	12
8回	平成12年12月16日	18	23	41	13(4)
応用	平成13年 3 月17日	7	18	25	6(3)
9回	平成13年12月15日	18	30	48	18(7)
応用	平成14年 1 月19日	4	18	21	8(4)
10回	平成14年 7月20日	23	25	48	30(1)
応用	平成14年12月19日	11	9	20	30

図1．ピアカウンセリングフローチャート

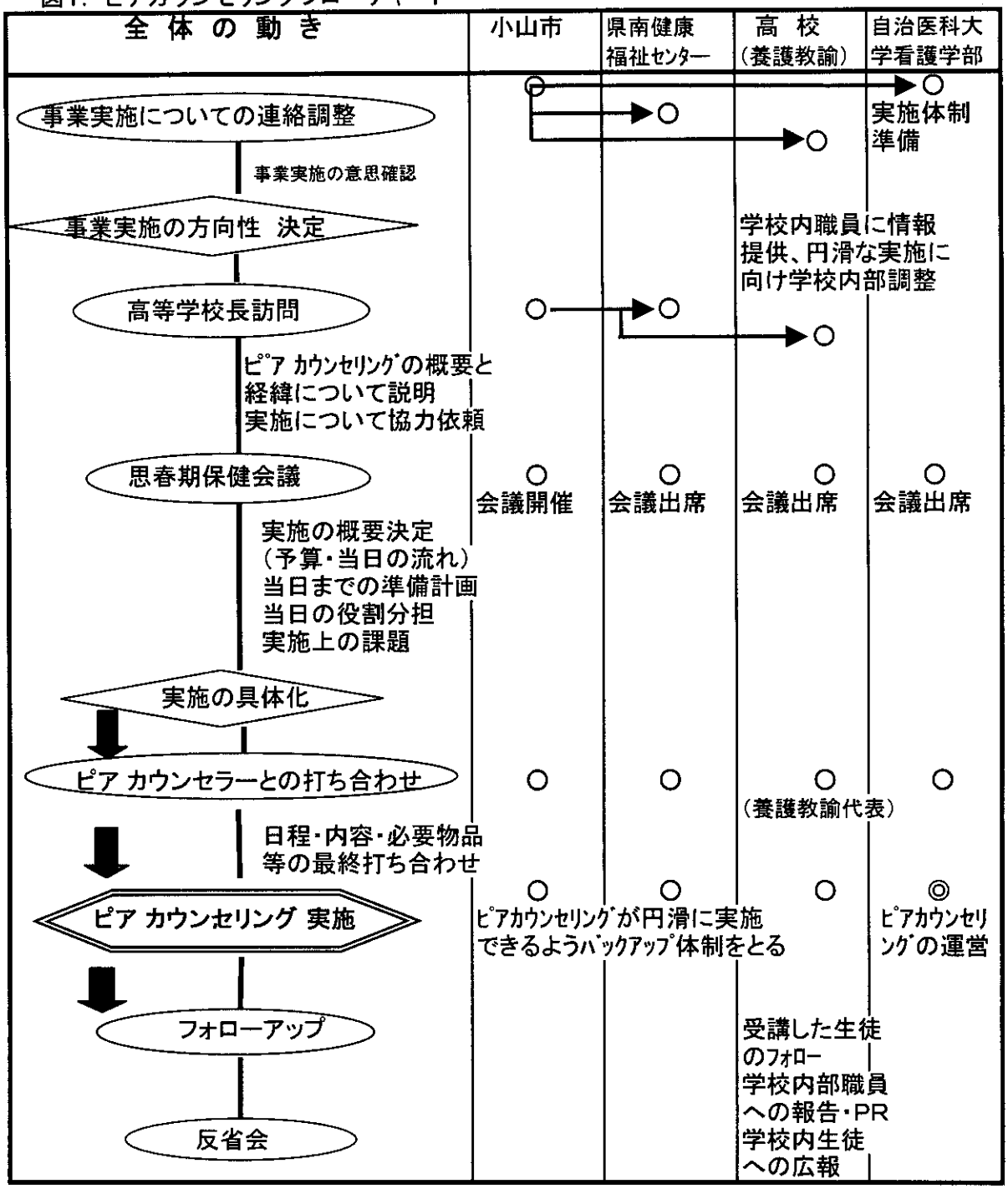


表3. 平成14年度思春期ピアカウンセリング講座の概要

目的	基礎講座では高校生に対し、思春期の特性を理解させるとともに、性に対する正しい知識・情報を伝える。そして、性にかかわる態度や行動を、将来を見据えて自己決定できる能力を高めていけるようサポートする。 応用講座では、学んだ自己決定の必要性を他の生徒に伝達できるためのステップアップの講座として開催する
対象者	市内高等学校生徒及び市内在住の高校生。 ただし応用講座は、基礎講座を終了した生徒のうち、希望者。
実施内容	ミニレクチャー、ロールプレイ、クイズ、グループワーク等の手段により、性に対する正しい知識を持たせ、性にかかわる態度や行動を主体的に、決定していく能力を高める内容
担当者	ピアカウンセラー：自治医科大学看護学部学生　約20名 スーパーバイザー：自治医科大学教授
周知方法	市内高等学校長あて通知。学校内のポスター掲示 新聞等に掲載
実施機関	小山市（健康課・学校教育課・生涯学習課） 県南健康福祉センター 小山市学校保健会高校部会 自治医科大学看護学部

表4. 基礎講座 【平成14年7月20日（土）】 プログラム

9:30～10:00	受付
10:00～12:00 午前の部	・自己紹介、ラポールゲーム ・イメージエクササイズ ・心理テスト ・男女の違いは何だろう？（男と女の特徴）
12:00～13:00	昼休み
13:00～15:00 午後の部	・避妊をしよう(ピルって何？) ・STD, HIVについて ・君への手紙
15:00～	フリートーキング

表5. 応用講座 【平成14年12月7日（土）】 プログラム

13:00～13:30	受付
13:30～16:00	・自己紹介、ラポールゲーム ・前回（基礎講座）の振り返り ・男女間の友情とは ・愛のタイプ ・パートナーがHIVだったら
16:00～	フリートーキング

平成14年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

ピアカウンセラー養成マニュアル作成に関する研究班

分担研究者　堀内成子　聖路加看護大学　教授
主任研究者　高村寿子　自治医科大学看護学部　教授
研究協力者　竹内千恵子　杏林大学看護学部　助教授
渡辺純一　井之頭病院　看護師
片桐麻州美　聖路加看護大学　講師

ピアカウンセラー養成マニュアル作成のため、過去に実施した養成セミナーの受講生にアンケートを実施した。その結果に基づき、これまでの養成セミナーの内容に評価・検討を加え、約 30 時間の新しいピアカウンセラー養成セミナーのカリキュラムを作成した。そして、大学生年代を対象とし、各地域から代表を集め、３泊４日のピアカウンセラー養成モデルセミナーを実施した。その後、セミナー受講生は、仲間に対して伝達講習を行い、主に高校生を対象に、ピアカウンセリングの実践活動を行った。本研究では、これらのプロセスと、今後の課題について報告する。

共同研究者

前泊典子　沖縄県北部地区医師会北部看護学校
大城凌子　〃
前田ひとみ　宮崎医科大学医学部看護学科
武富弥栄子　佐賀県医科大学保健管理センター
大久保京子　佐賀県厚生部健康増進課
千浦淑子　高知医科大学看護学科
忠津佐和代　川崎医療福祉大学
寺澤むつみ　新潟県柏崎市立第一中学校
石田登喜子　福島県立看護大学
鈴木真弓　岩手県立一関高等看護学院
羽入雪子　日本赤十字秋田短期大学
佐藤直子　秋田県秋田中央健康福祉センター

Ⅰ．過去のピアカウンセラー養成セミナー受講後のフォローアップ評価

１．はじめに

これまでのピアカウンセラー養成セミナーを受講した人々を対象としたアンケートを実施し、これまでのピアカウンセラー養成セミナーを再評価し、新しいピアカウンセラー養成セミナーをプログラムする際の基礎資料とすることを目的とする。

尚、本調査では、一対一のピアカウンセリングを個別ピアカウンセリング、ピアカウンセリング手法を用いた集団への性教育を集団ピアカウンセリングを称する。

２．調査方法

調査対象：これまでに実施されたピアカウンセラー養成講座を受講した者

調査内容：対象者の背景、個別ピアカウンセリングについて（実施状況、セミナーの内容の可否、実施意欲等）、集団ピアカウンセリングについて（実施状

況、セミナーの内容の可否、実践しなかった理由等)、実践時に大人から欲しいサポート等

調査方法：自記式質問紙・配票郵送法

調査時期：2002年7月～8月

3．結果

配布数： 265通　回収数：91通

有効回収率：34.3%

1）背景

対象となったピアカウンセラー養成セミナーと実施期間・回答者数は以下の通りである。

セミナー名・実施場所	実施期間と内訳	回答者数
第1回ピアカウンセリングセミナー	3日間（1日通・1泊2日）	8名(8.8%)
第2回ピアカウンセリングセミナー	3日間（2泊3日）	20名(22.0%)
秋田県	2日間	9名(9.9%)
福島県	2日間	4名(4.4%)
新潟県	2日間	3名(3.3%)
沖縄県北部保健所	2日間	8名(8.8%)
沖縄県名護青年の家	2日間（1泊2日）	12名(13.2%)
沖縄県石垣市	2日間	27名(29.7%)

男女別では、男性12名(13.2%)、女性79名(86.8%)で、ほとんどが女性であった。

年齢は15歳～28歳までで、最も多かったのが21歳15名(16.5%)で、次いで22歳13名(14.3%)、20歳・19歳各12名(13.2%)の順番で、主に大学生年代が多かった。

受講当時の所属は大学生・専門学生が最も多く59名(64.5%)で、高校生は30名(33.0%)、社会人が2名(2.2%)であった。大学・専門学校生の専攻は、看護系が45名(49.5%)で、ほぼ半分を占め、次いで心理系が6名（6.6%)、残りは1～2名ずつで、農業・工業系、教育学、医学部、国際経済学であった。

2）個別ピアカウンセリング

「セミナーを受講後、友人等からからだや恋愛・セックスのことなどの悩み相談を受けたことがあるか」（個別ピアカウンセリングの実施）という質問に対して、55名(60.4%)の者が「ある」と回答している。

この「ある」と答えた者に、セミナーでの学びをどのくらい活用したかを、セミナーの内容別に、大いに活用したから、あまり活用しなかったまでの5段階で、評価してもらった。その結果は図1の通りである。このうち、「大いに活用した」「まあまあ活用した」を活用群、「少し活用した」「あまり活用しなかった」を非活用群とし、比較すると、活用群が5割を超えたものは「セクシュアリティの具体的知識」「ピアカウンセリングの基本概念」「アクティブリスニング（基本的向き合い方)」「アクティブリスニング（感情と向き合う)」であった。5割には満たなかったものの、非活用群を上回ったものは「セクシュアリティの概念」「ピアカウンセリングの8つの誓約」「アクティブリスニング(オープンクエスチョン)」「アクティブリスニング（パラフレーズ)」で、5割に満たず、「どちらともいえない」を下回ったものは「アクティブリスニング（要約するスキル)」「コ・カウンセリング実習」であった。非活用群が、活用群を上回った項目はなかった。

「ない」と回答した者に、友人から相談があった場合、セミナーでの学びを活かしたいと思うか」との質問に対しては、29名(82.9%)が「はい」と回答している。

「友達の相談など、1対1のピアカウンセリングを実践するとしたら、あなたの受けたセミナーで実践できると思うか」という質問に対して、「十分できる」から「できない」までの5段階で回答してもらった。その結果「なんとかできる」が最も多く37名(40.7%)で、次いで、「どちらともいえない」が33名(36.3%)であった。

「あまりできそうもない」「できない」と回答したものに、セミナーで不足している部分について、内容別に複数回答で答えてもらった。その結果、最も多かったものが、「セミナー後のフォローアップなど」で7名(46.7%)であった。次いで、「全体的なセミナーの時間」が6名

(40.0%)、「ピアカウンセリングの講義」4 名(26.7%)であった。

「公的期間やボランティアグループで、個別ピアカウンセリングを実践してみたいか」という質問には、55 名(60.4%)が「はい」と回答した。「すでに実践している」という者も 4 名(4.4%)いた。

「はい」「すでに実践している」と回答したものに、実践のために必要なサポートを自由回答で記載してもらった。その結果、多かった回答は、「勉強の場・機会」「実践の場・機会」「スキル練習の場・機会」「スーパーバイザー・アドバイザー」といったものであった。

3）集団ピアカウンセリング

「セミナー終了後、集団ピアカウンセリングを実践したか」という問いには、「実践した」が 37 名(40.7%)、「実践に向けて計画中」が 4 名(4.4%)で、「実践しなかった」が 49 名(53.8%)で実践しなかったものがやや多かった。

「実践した」「実践に向けて計画中」と答えた者に、セミナーでの学びをどのくらい活用したかを、セミナーの内容別に、大いに活用したから、あまり活用しなかったまでの 5 段階で、評価してもらった。その結果は図 3 の通りである。このうち、「大いに活用した」「まあまあ活用した」を活用群、「少し活用した」「あまり活用しなかった」を非活用群とし、比較すると、活用群が 5 割を超えたものは「セクシュアリティの概念」「セクシュアリティの具体的知識」「ピアカウンセリングの基本概念」「ピアカウンセリングの 8 つの誓約」「アクティブリスニング(基本的向き合い方)」であった。特に、「セクシュアリティの概念」「セクシュアリティの具体的知識」は 7 割を超えていた。5 割には満たなかったものの、非活用群を上回ったものは「アクティブリスニング（オープンクエスチョン）」「アクティブリスニング（感情と向き合う）」「アクティブリスニング（要約するスキル）」「ブレインストーミング」で、5 割に満たず、「どちらともいえない」を下回ったものは「アクティブリスニング(パラフレーズ)」であった。非活用群が、活用群を上回った項目は、「コ・カウンセリング実習」であった。

「実践した」「実践に向けて計画中」と答えた者に、実践（計画）してみて、セミナーに不足していると感じた部分を複数回答で答えてもらった。その結果、「不足している部分はなかった」が 10 名(24.4%)で最も多かったが、同率で「コ・カウンセリング」があった。次いで、「全体的なセミナーの時間」「ピアカウンセリングの演習」が 9 名(22.0%)、「セミナー後のフォローアップセミナーなど」8 名 20.0%)、「ピアカウンセリングの講義」が 7 名(17.1%)のような順番であった。

具体的に希望する内容や意見を自由記載で回答してもらったが、「セクシャルマイノリティについてもっと知りたい」「実際に会った話やピアの体験談、受講後一般の人に実践」「もっとピアについて話し合う時間を」という意見があった。

「実践した」「実践に向けて計画中」と答えた者に、実践活動をするにあたり、必要な大人からのサポートを自由記載で回答してもらったところ、「実践する場・話し合う場、機会の提供」「必要物品などの金銭的サポート」「対象者の確保」「スーパーバイズ・アドバイス」「日程調整など」「学校・大人への理解、ピアの周知」「見守ってほしい」などの意見があった。

「実践しなかった」と答えたものに、その理由を複数回答で答えてもらった。その結果、「実践したいが充分な時間がない」が 26 名(53.1%)、「実践したいが実践できる能力が身についていない」が 23 名(46.9%)が主な理由であった。

4）セミナーについて

「このピアカウンセリングセミナーを、友人にもすすめたいと思うか」という質問に対し、「思う」と答えたものは 79 名(86.8%)であった。

4．考察

1）対象者について

今回、対象としたピアカウンセリングセミナーの半数は看護系の学生で、その結果、ほとんどが女性であった。その理由として、これまで

のピアカウンセリングは、栃木県の自治医科大学看護短期大学で実践されていたものであり、基本的な興味・関心があり、比較的知識が入手しやすい看護学生が、実践には適していると考えられていたためであろう。なので、広報活動も看護系に力が入っていたと考えられる。また、地域により格差もあり、福島県では、回答者の100%、第2回ピアカウンセリングセミナーでは、90%が看護系であるのに対し、沖縄県石垣市には、高校までしかないため、回答者の100%が高校生であった。沖縄県北部保健所では、5名(62.5%)が心理系の大学生であった。

2）対象者×個別ピアカウンセリング・集団ピアカウンセリング

所属別に、個別ピアカウンセリングの実施状態を見てみると、高校生に比べ、大学生・専門学校生が有意に友人の悩み相談を受けていることがわかる（P<0.05）。また、1対1のピアカウンセリングの実践に関しても、できる群が有意に高かった。今回、高校生の対象者のほとんどが沖縄県石垣市で、2日間のコースを受けているものだけであったという背景はあるが、既存のスタイルのセミナーでは、個別ピアカウンセリング実践に関しては、大学生年代以上が向いていると考えられる。

同様に、集団ピアカウンセリングの実践に関しても、大学生・専門学校生の方が、有意に実践（または実践を計画）をしていた（P<0.01）。

個別ピアカウンセリング

	実施	実施せず	合計
高校生	12(40.0%)	18(60.0%)	30(100%)
大学・専門学生	41(69.5%)	18(30.5%)	59(100%)
合計	53(59.6%)	36(40.4%)	89(100%)

P<0.05

集団ピアカウンセリング

	実践	実践せず	計画中	合計
高校生	4 (13.3%)	23 (76.7%)	3 (10.0%)	30 (100%)
大学・専門学生	31 (53.4%)	26 (44.8%)	1 (1.7%)	58 (100%)
合計	35 (39.8%)	49 (55.7%)	4 (4.5%)	88 (100%)

P<0.01

3）個別ピアカウンセリング

個別ピアカウンセリングの実践に対する質問では、6割が実際に相談を受けたことがあると回答していた。実際に相談を受けたことがないものでも、その8割以上が友人から相談されたら、セミナーの学びを活かしてみたいと考えており、公的機関・ボランティアグループなどで活動したいと考えている（実践している）ものも6割存在しており、セミナー受講生の1対1のピアカウンセリングを実践する意欲は高いと考えられる。

実践者のセミナーでの学びの活用状況では、ほとんどの内容が活用されていた。「要約するスキル」「コ・カウンセリング実習」の活用状況が他と比べ、低かった。この理由としては、セミナーでは「要約するスキル」は実施せず、口頭での説明だけに終わったことが考えられる。「コ・カウンセリング実習」は、後のできない群の理由でも述べるが、実践する機会が1度だけであり、また、実施後の個々へのフィードバックがなかったためよくわからなかったといった理由が考えられる。

このセミナーで、個別ピアカウンセリングが実施できるかという問いには、「なんとかできる」が最も多かったが、「どちらともいえない」が次に多く、このセミナーだけで、充分にできるレベルに持っていくのは難しいと考えられる。また、この回答の「十分できる」「なんとかできる」をできる群、「あまりできそうにない」「できない」をできない群で、「どちらともいえない」を含めた3群と、セミナーの日程（3日間のコースと2日間のコース）とで、クロス集計すると、下の表のように、3日間コースの方が、できる群が優位に高いという結果になった（P<0.05）。

	できる群	どちらともいえない	できない群	合計
3日間	19 (67.9%)	5 (17.9%)	4 (14.3%)	28 (100%)
2日間	23 (37.1%)	28 (45.2%)	11 (17.7%)	62 (100%)
合計	42 (46.7%)	33 (36.7%)	15 (16.7%)	90 (100%)

P<0.05